富岡分館 図書館だより

臨時増刊号

「みどりの森と、本の森と」

2023年9月20日発行

※写真提供：おおたかの森トラスト

2023年7月29日（土）に「みどりの森と、本の森と」と題し、みどり自然課とイベントを開催しました。おおたかの森トラストの代表 足立圭子さんをお迎えし、「おおたかの森に関する自然やいきものについて」のご講演、参加者全員で「森の再生地」へ移動し、「おおたかの森緑地にて自然とのふれあい」を楽しみました。子どもも大人もたくさんの新しい発見と出会いの一日となりました。

最初に 2022 年秋、「おおたかの森トラスト」緑綬褒章受章の動画（テレビ埼玉制作）を鑑賞し、参加していただいた柴山議員、藤本市長にご挨拶をいただきました。

足立氏：それでは「緑の森と、本の森と」をはじめます。この企画はありえないんですね。
図書館が主体になってこの企画をみどり自然課に話をして私のところに来た※。
やりましょうと言ったけれども人が集まるかどうかはいつも不安です。（当日は満員御礼）
（※以前にみどり自然課が企画して図書館と共催で行った同様のイベントがあり、図書館の利用者の声があったため、今回のイベントを企画しました）

まずここ武蔵野台地は見渡す限りススキの原でした。今から 350 年前、新田開発がはじまり、一番有名なのは、今よく言われている「三富の開拓」ですが、これは後半部分です。それよりもずっと前から三ケ島、川越の開拓があり、最後が三富です。ここにコナラやクヌギ、アカマツを植えました。ここで一番重要なのはアカマツです。なぜならアカマツは切ってしまうとなくなってしまうからです。

足立氏「なぜアカマツを植えたと思う？」　子ども「キノコが出るから？」

足立氏「おおすごいな。何のキノコが出る？」　子ども「マツタケ？」

足立氏「残念。マツタケは、はえている土に影響されるんです。だから土の種類が違うのでここでは育たないんですが、アカマツを植えたわけは後で説明します（p.4)。とりあえずコナラやクヌギを植えました。」

植えた木が大きく育ちます。大きく育ったら…夏は伐ってはダメです。冬になってから伐ります。今年の冬に伐ってたら、自然破壊だと言われました。「何が建つの？　工場が建つの？」…そうではないんですよ。

春になると土から芽が出ます。明るくなるから芽が出るので、学校の校庭の面積の 1/4 ぐらいをいっぺんに伐ります。そうしましたらここには、子どもたちの友だち（虫）がやってきます。虫もいろいろ種類がいて木が若くないとやってこないのがいるんですよ。今、クロシジミが絶滅に瀕してます。もう所沢ではほとんどいなくなっていますが、まだやればどこかにいるのが寄ってきて増えてくれるかもしれないので伐ります。

これがアカマツです。切り株から芽が出て育てているものです。伐った木を昔は運び出しました。今は小学生や中学生が来てくれて運び出します。

昔は伐った木が燃料でした。お風呂やご飯炊き全てで使っていました。持っている森を全部伐ってしまったらなくなってしまうので、少しずつ少しずつ分けて伐って、若返らせていくということをやっていました。

今はその木を持ってきてキノコの駒を打ちます（原木にドリルなどで駒の入る位の大きさの穴を開け、種駒を埋め込みます)。キノコも木によって種類が違います。ヒラタケはヒラタケが好きな木があります。、シイタケはシイタケ、ナメコはナメコ。木によってキノコが違うので、それを私たちは活用しています。売ってるものと違って大きいんですよ。ホダ木が 5 年経つとボロボロになります。それをみんなで集めます。そうすると翌年カブトムシ、木によってはクワガタが来ます。親がいなければ卵を生みにこないので、どこかに親がいるんです。今年カブトムシやクワガタが来たら、来年の分を用意してあげれば来年も来ます。

足立氏「カブトムシ探しに行く？　行くよね？　ハチがいない？」　子ども「いるーーー」

足立氏「ハチがいないと樹液が出ないんですよ」

子ども「知ってるー」子ども「わかんなかった。初めて聞いた」

足立氏「ハチはね。自分のお家を作るために木をかじります。だから、ハチの巣は紙でできているんです。雨に当たらないところに巣を作ります。一生懸命ハチの巣のために皮をむくと樹液が出るからそこにカブトムシがやってきます」

昨日も夕方見に行ったら樹液が出ていました。カブトムシが来ていましたが、みんなが気をつけなければいけないのはスズメバチです。アシナガバチとは持ってる毒素が違いますよ。スズメバチがいたら追っちゃダメですよ。小さくなって友だちに教えてあげてください。間違って刺されたら救急車を呼ばなければならない人が 10 人に 1 人ぐらいいます。アシナガバチは大丈夫。他のハチは刺しません。もしハチが 100 種類いても刺すのは数種類だけです。

枯れたアカマツがゴロゴロころがっていました。地主さんが売りに出したいというので、「私たちが一部買いますから、所沢市も買ってください」とお願いに行った時に、(当時は市長が別の方)「こんな汚いところは買うわけにはいかない」と言われたんですよ。

足立氏「(そう言われて) よしやってやろうじゃないのって、何をやったと思いますか？」

子ども「きれいにした？」

足立氏「そうだね。きれいだけど…目的持たなくちゃ。例えば勉強するにも目的持つでしょう。じゃあ、アカマツが枯れてゴロゴロしてたのを何にしようか？」

他には使えないので、炭を焼いてあげると隙間だらけになって地球にいいことが起きるんです。木酢液をを集めると水虫の薬にもなりますし、化粧水にも入れるし、野菜の農薬が減る、土壌の改良ができる優れものなんですが、所沢でまずこういうことをきちんとやっている団体はないんですよ。

足立氏「これをどうする？　藤本 (市長) さんご存知ですよね？　一番最初に藤本さんがやってくれました。川にステンレスのカゴを入れて、毎年毎年炭を交換します」(藤本市長さん頷いている)

足立氏「何でだろう？」　子ども「きれいになる？」

足立氏「どうしてきれいになるの？」

よくみなさんが、炭は川、水をきれいにしてくれると言うのですが、それは間違いです。さっき言ったように (炭は) 穴だらけ、穴には何が住む？　とても栄養のあるものが上から落ちてくるので小さな生き物が食べてくれる。次のものが食べる、食べる…で川がきれいになる。川を忘れてほしくないから毎年やっています。今でも続けています。だからそろそろ炭がなくなって、わざわざ買いに行かなければならなくなります。でも子どもたちと活動していたおかげで、子どもは川というものは汚い水だということが分かります。あと、危ないということも分かります。平気で泳いで、ついでにアメリカザリガニを取ってきます。今年行ったら (アメリカザリガニが) 減っているんですよ。もう子どもたちが、がっかりしてしまってね。なんでアメリカザリガニがいないんだと。おかげで小さな魚がいました。

これをつなげてあげると所沢の川の一番メインはうなぎです。うなぎは川から登ります。おります。川と海がつながります。うなぎはこの魚の中では生態系のトップにいるので、これを戻してあげないと川としては満足しないのです。ですから、私たちはうなぎがどうやって棲めるかをいつも考えながら活動しています。

2009 年さきほどバサッと木を伐ったところがここです。冬が来て春になって 6 月に宮前小学校の子が来ました。

足立氏「さっき何年だった？」　子ども「2009 年」

足立氏「これ何年経っている？」　子ども「10 年」

大人だけではなく、みんなで手入れしています。子どもたちは、宮前小学校 5 年生が学校の授業として手入れしています。西富小学校と清進小学校も来ています。生きものは繋がっているということが炭からでも分かったと思いますが、木があれば木にやってくる生き物がそれぞれ違います。お家だってね。お父さん、お母さんがいて別な人がいたら困るでしょう。繋がっているよね。それと同じなんです。生き物が繋がっています。

それが生態系ピラミッドになりますが、これは三角形ではありません。立方体です。下の面積によって上に乗ってくるものの安定度が違います。この一番上にくるのがオオタカではなくて人間です。下がダメになれば上はダメになると決まっているのです。

1900 年のおおたかの森と呼ばれている所沢狭山川越入間三芳大井町の地図です。これだけたくさん木がないと、ここには人が生きてけなかったそうです。

はい、何年経ちましたか？　さきほどは 1900 年ですから。緑が減りました。ここで気がついて、どうにかならないかと始めたのが「おおたかの森トラスト」です。その中で特に有名なのがくぬぎ山です。くぬぎ山は県内で一番大きな平地林です。でも、この時代にダイオキシン問題が出ました。99 年になるとさらに減りました。

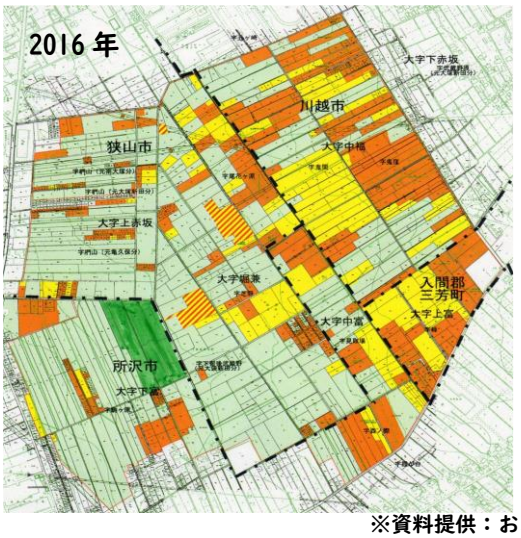
子ども「めっちゃちっちゃく見える」

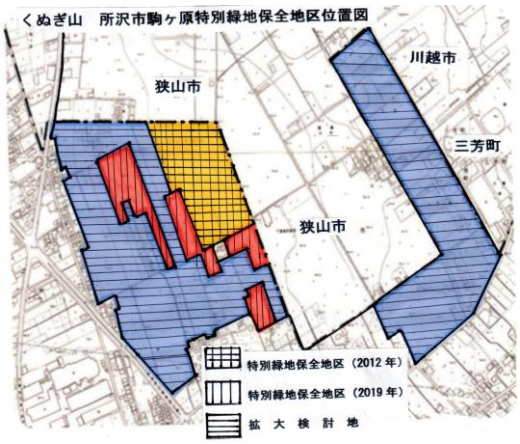
足立氏「そうなんだよ。めっちゃちっちゃくなった？」

色付けしていくと、オレンジと黄色は森がなくなったとこです。増えたところが緑です。これは所沢市が買ったんです。私の言い方で言うと所沢市が買ってくれたんです。

そして、所沢は 2019 年に国と県と所沢主体で特別緑地保全地区という指定を行いました。これ、他の市町村にないんです。要するに市民が動かないのと大切さがわからないのかもしれないのですが、所沢は市長さんはじめ市の職員の方々の力でここまで来ました。でも、これでも売るのは嫌だという方がいらっしゃるんです。なぜかというと、道路沿いだったら開発できるので市が買うより倍の値段で売れます。でも先ほど言いましたが、ただで生き物がついてくる。市が頑張っているんだから、国がやりましょうよ。テレビで所沢は借金してでもやっていると言っていましたよね。

1993 年くぬぎ山の写真です。偶然私が撮りました。手前は開発されてなくなりました。なくなったところを撮ったら後ろに何がありましたか？　アカマツです。古い植生を見ると 3 分の 1 がアカマツなんです。何でアカマツかというと江戸の町を作るのにアカマツが必要だった。アカマツが腐りにくいので、江戸の水道、下水道、橋、川を使って持っていってるわけです。ここだけではありませんが、アカマツはそういう形で使っていましたので多かったのです。





※資料提供：おおたかの森トラスト

『オオタカの森へ（薪炭林としての雑木林から生態系豊かな森へ）』（武蔵野の森自然研究会/著 1994 年 p.26～）　たまたま以前書いたものを読ませてください。オナガとツミが共同で子育てをしていました。先ほどの大きなアカマツにツミが巣を作ります。周りの木にオナガが巣を作ります。そこにカラスがやってくると、まずオナガが「ギャー・ギャ・ギャ・ギャ・ギャ。ギャー・ギャ・ギャ・ギャ・ギャ、カラスが来たよ」するとツミが「キー・キッキッキッ、おいみんな気をつけろよ。キー・キッキッキッ」何年かそれで頑張って子育てをしていました。

ところがある時、カラスの大群が 50 羽ほど来ました。もうどうやったって敵わない。カラスに体当たりするんです。ここに書いていますけど、大きなカラスにオナガが体当たりするんです。オナガの巣がこの時 27 カ所ありました。まず向かっていくのはオナガなんです。オナガがカラスにぶつかってどんどん行くけど敵わない。カラスは空が暗くなるほど攻め込んできて最終的に全部（ヒナを）持って帰りました。そして残ったのは親鳥だけです。親鳥が虚しく「キー、キー…」というのがこの近くでありました。それで、どうしてだろうと調べたらアカマツがほとんどなくなっているんです。くぬぎ山もどこもかしこもアカマツを基本とする姿勢がなかったのでしょう。オオタカは観るんだけど、オナガの観察までしない…。カラスがやってきて、残ったのは…。これが生態系ですね。

平地林 5 階建てです。大きな木、中くらいの木、低い木、草、そして土です。ちなみにこの時 1cm の土ができるのに 100 年かかります。その代わり大雨が降っても全部吸い込んでいます。流れ出ることはないです。

この時は清進小学校がアカマツを植えました。授業でたったこれだけの 30cm ほどのアカマツを 50 本植えました。その後どうなったでしょう？

何年経ちましたか？　子どもエコクラブは、小中学校で活動しています。子どもが一生懸命やっているから皆「おーっ」て言うんだけど、大人じゃ当たり前。50cm の苗がここまで伸びました。この間手入れはするんですよ。子育てと同じで手入れはするんですよ。アカマツにあった手入れをしてあげます。

足立氏「今年もっと大きくなった」
子ども「おおきくなった！！…」

こうやってあちこちでアカマツが増えてくれれば、生態系ピラミッドの一番元になるオオタカやツミが戻ってきてくれて中の自然が安定する。

昨日会議があって、「木はいいんだけど、落ち葉が困るんだ」って言った人がいるんですよ。「毎日毎日何人もかけて落ち葉掃きして大変なんだよ」と言うんです。でも落ち葉はあって当たり前なんです。社会貢献だと思えばいいことだと私は思います。これはとても楽しい作業です。木の枠を作って紐 4 本通します。みんなで落ち葉を集めてきて入れます。上から降ります。どんどん踏みます。落ち葉ケーキの出来上がり。こうすると腐るのが早いんです。それと子どもが楽しんでやる。

足立氏「ツバメの巣の材料はどこから来ますか？　これ富岡公民館のところの写真です」
子ども「田んぼ？」　足立氏「この辺は田んぼはないんですよ」　子ども「畑？」
足立氏「畑の土は乾燥していていくらツバメが唾液だしても固まらないんです。カラスに敗れて　　どこに来るかというとここ（おおたかの森）に来ます」

再生地ができたおかげで、もしかして富岡公民館のつばめもほっとしてるかもしれない。ギンヤンマは水草に乗って卵を産みます。ですから水草がないと増えません。

足立氏「キイトトンボ。黄色いマッチ棒のようなのが飛んでいるのがわかりますか？」
子ども「見たことない」
足立氏「なかなか見られないけど、今日緑地に行くと見られますよ。目の前を飛びますよ」

伸栄小学校には学校ビオトープを作りました。
足立氏「学校のプールってヤゴがどれぐらいいそうですか？」
子ども「100！」
足立氏「100より上だと思う人？　（時間をおいて）5000です。」
参加者「え～！！（驚く）」
それを毎年毎年学校では捨てているんですよ。もったいないと思いますよね。みなさん。
5000匹でも1000匹でも。救出した後どうしたらいいと思いますか？
宮前小・清進小も救出しています。西富小も学校ビオトープを作りました。
救出したらビオトープに放せばいいわけでしょう。そうすると子どもたちはトンボを育て、助け、生まれるとこまで見られるし、水草にはメダカもいるし、他の鳥も来るので、この学校ビオトープというのはとても大切なんですが、おおたかの森トラストが助成金をもらい、学校と話し合って、やっとチャレンジできるというような状態です。

哺乳類の3種に1種（33%）　鳥の5種に1種（20%）　植物の4種に1種（25%）
生態系の上の部分を守れるのは地域しかないです。
16年前、さきほど言った森の再生地です。煙突2本で燃やしていました。毎日黒い煙が出るので、住民は厚生労働省に駆け込みました。ここの人たちが日本の法律を変えたんです。
14 年前にこういう状態で売りに出たので、地主さんと交渉して 2 週間で 2400万円集めました。マスコミを使わずに地域の人だけにお願いして。やはりこの地域の人たちは熱心だったと思います。皆さんが協力してたった 2 週間で 2400万円集めて土地を買いました。
今の様子です。さきほど、その経過はテレビで見ていただきましたね。
フクロウがやってきています。みんな探鳥会って鳥を見に行くでしょう？
私に言わせるなら向こうはちゃんと人間を見てます。ですから、このフクロウは私たちのことを認識して、私が行っても安心していて（目は）開かないです。開くのはびっくりしてるときです。ある時、私が作業をしていたら後ろで気配を感じました。嘘みたいな話ですが、振り向いたらフクロウがいたんです。携帯だと撮影できないし、「今家に帰ってカメラ持ってくるから」と言ったら、ちゃんと待っていてくれました。（会場：笑）
このルリビタキのオスもすごい美男子で。これ人間だったら絶対惚れるような（笑）。これも冬になるとやってきて人間をちゃんと見ています。

みどりのパートナー制度は、ふるさと所沢のみどりを守り育てるための活動です。この「みどりのパートナー」に「おおたかの森トラスト」が加盟しています。そして、今だいたい 10ha ぐらいの緑地の手入れをしています。場所によって手入れの仕方が違うので同じ手入れはできません。「こどもエコクラブ」が「みどりのパートナー」に入ります。所沢でこどもの団体の登録は初めてでしたね。所沢は「生物多様性」というすごいことにチャレンジしています。

『生物多様性ところざわ戦略』(所沢市環境クリーン部みどり自然課/編　2021 年) この本は 2000 円ですが私は買いました。これは周りの市町村にはありません。これは今ある自然を残すだけではなくて、もっともっと豊かにしていくための活動です。

子どもエコクラブは現在 131 名です。大人が補佐をしていかないとできませんので、たくさんのリーダーが必要になります。

(質問コーナー)

子ども「森にいったとき、虫にさわっていいですか？　持って帰ってもいいですか？」

足立氏「さわっていいけれど、毒虫にさわったらだめですよ」(さわりかた実演)
よく見てから、もしかしたら次の人のことを考えると放してあげた方がいいかもしれないし、ゴキブリだったらお家に持って帰ってもいいです (笑)。森のゴキブリは (家のと) ちょっと違う (笑)。そこのところをよく考えてね。仲間とお友だちと話したり、お父さんお母さんと話しして、持って帰っていいものは持って帰る。持って帰れないものはそこにそっとおく、よろしいですか？」

子ども「はい！！」

子ども「(森に) 何もいなかった？」

足立氏「そうなんですよ。所沢の歴史を考えるとススキの原だったのは湿気がないから、虫は生きていけなかったんです。木を植えたおかげで水気ができて腐敗を進めました。やっと生きものが棲むようになったので、今あるものを残して、みんなで工夫して豊かに増やしていってあげましょう。(参加者：大拍手)

※写真提供：みどり自然課　掲載は許可をいただいています。

所沢市環境クリーン部みどり自然課

イベント「みどりの森と、本の森と」に、多くの方にご参加いただきありがとうございます。ご協力いただきました、おおたかの森 トラスト代表足立様並びに富岡分館の皆様に御礼申し上げます。このようなイベントを開催し、子ども達の沢山の笑顔を見ることができて良かったと感じています。所沢には、みどり豊かな自然が溢れていて、子ども達には、その財産を守り受け継ぐ担い手になっていただきたいと思っています。わずかな時間でしたが、普段なかなかできない体験・経験する時間を提供できたことを嬉しく思います。

所沢図書館富岡分館長　宮崎祐美子

この度、近隣地域に住む子どもたちや保護者に地域の自然や生きものに実際に触れて興味を持っていただくこと、また地域で環境保護活動をしているおおたかの森トラストの代表　足立圭子さんにお話を伺い生物多様性について理解を深めていただくことを目的に「みどりの森と、本の森と」を開催いたしました。おおたかの森トラストは 20 年以上にわたり、産業廃棄物処理場だった土地の再生を行っており、昨年緑綬褒章を受章するなどその活動が注目されていたため、多くの方に参加していただき、環境への関心の高さが伺えました。館内には団体やみどり自然課から借り受けたパネルや図書館所蔵の参考資料を展示し、イベント参加者以外の来館者にも興味を持っていただけた様子でした。何よりも現地での子どもたちの笑顔と歓声が心に響いた会となりました。

編集・発行　所沢図書館富岡分館　　☎04-2943-3636